

Title	現代青年の扶養意識に関する研究
Author(s)	増本, 康平; 森田, 敬史; 渡辺, 美那子; 王, 健
Citation	臨床死生学年報. 6 P.21-P.28
Issue Date	2001
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/5344
DOI	10.18910/5344
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

現代青年の扶養意識に関する研究

増本 康平・森田 敬史
渡辺 美那子・王 健

Key words : 扶養意識, 青年, 規範意識, 家族機能

1. はじめに

昨年の4月から介護保険制度が開始されたこともあり、今まで以上に老親扶養に関して多くの関心が向けられているが、これまで老親扶養を取り扱った調査研究はあまり進められていない。しかし、超高齢化社会へと進展の度合いを深めつつあるわが国において、その研究の重要性が一層強まっている。特に、2025年に4人に1人が65歳以上（厚生省人口問題研究所、1997）という超高齢化時代に、親を扶養する立場におかれるであろう現在の青年が、親の扶養についてどのように考えているのかを明らかにすることは、これからの高齢者福祉を考えていく中で1つの方向性を示唆すると考えられる。

過去、細江（1987）は大学生の扶養意識を調査している。細江の研究では、大学生の扶養意識を介護扶養意識、経済扶養意識、同居扶養意識に分類し、扶養意識について検討している。しかし、細江の扶養意識の分類は主観的なものであり、大学生の扶養意識の構造を実証的に明らかにしているわけではない。この他にも両親に対する扶養に関する意識を調査した研究は行われているが、同居扶養意識（廣嶋、1991）、扶養規範意識（坂本、1990）など研究者によって扶養意識の捉え方が異なっている。また、家族関係に対する満足度（細江、1987）や規範意識と扶養意識との関連性についての研究（例えば、東条、1987；田淵、1991）もなされてはいるものの、大学生を対象とした研究は行われていない。しかし、現在、高卒者のうち約50%が大学・短大に進学すること（文部省、2000）から、高等教育を受けた彼らが、将来の価値意識を規定するうえで重要な役割を果たすと考えられる。

2. 目的

本研究では、大学生を対象とし、大学生の扶養意識の構造を明らかにする。さらに、その扶養意識の形成に家族環境や規範意識が及ぼす影響を検討する。

3. 方法

調査対象

近畿圏（大阪府・兵庫県）の大学に在籍する大学生・大学院生293名（男性140名、女性153名、平均年齢 20.15 ± 2.30 歳）を対象に質問紙調査を行った。その際、被調査者の匿名性

やプライバシーを保証するために無記名式を採用した。また、調査は2000年6月から7月にかけて行われた。

調査内容

1) 被調査者の属性

フェイスシートでは、同居者の有無、祖父母との同居経験、続柄、両親の老後についての会話の有無を尋ねた。

2) 扶養意識

筆者らが作成した質問項目を用い、大学生が将来、親の扶養をどうしたいかという個人的希望を取り上げ、これを扶養意識とし測定した。したがってここでは、親の扶養をどうすべきかという一般的価値判断は取り上げない。それぞれの質問項目については当てはまる=7、かなり当てはまる=6、やや当てはまる=5、どちらとも言えない=4、やや当てはまらない=3、ほとんど当てはまらない=2、当てはまらない=1（反転項目は当てはまる=1から当てはまらない=7）の7件法で回答を求め、合計点を算出した。得点が高いほど扶養意識も高いといえる。

3) 家族機能

本研究では、家族機能の測定のために作成されたFES（Family Environment Scale；家族環境尺度）の日本語版（野口・斉藤・手塚・野村、1991）を用いた。FESは凝集性、表出性、葛藤性、独立性、達成志向性、知的文化的志向性、活動娯楽志向性、道徳宗教性、組織性、統制性の10の下位尺度から構成されており、各尺度は9項目からなっている。本研究ではこの10尺度のうち扶養意識と関係のあると思われる凝集性、表出性、葛藤性、独立性、道徳宗教性の5尺度（Table 1 参照）、45項目を家族機能とし、測定を行った。それぞれの項目については、あてはまる、あてはまらないの2件法で回答を求め、否定設問は肯定設問に変換して、9項目の総和（0～9点の範囲）で評価した。

Table 1. 家族機能の下位尺度（野口ら、1997を参考に著者らが作成）

凝集性	—家族メンバーが相互に関わり合い助け合い支え合う程度のこと
表出性	—家族メンバーが率直にふるまい率直に感情表出する程度
葛藤性	—隠さずに表現された怒りや攻撃、および、家族内の葛藤の程度
独立性	—家族メンバーが自分の意見を主張し自立的で自己決定をする程度
道徳宗教性	—倫理的、宗教的な問題や価値を重視する程度

4) 規範意識

規範意識の測定には、現代青年の社会意識尺度（久世・和田・鄭・浅野・後藤・二宮・宮沢・宗方・内山・平石・大野、1988）を用いた。現代青年の社会意識尺度は、規範意識、身近な事象への関心・社会的事象への無関心、自分の感覚や実感の重視の3つの下位尺度から構成されており、本研究では、この下位尺度のうち規範意識の尺度を使用し、大学生の規範意識を測定した。規範意識尺度は11項目で構成され、それぞれの質問項目について非常に賛成=5、賛成=4、どちらともいえない=3、反対=2、非常に反対=1（逆転項目は非常に賛成=1から非常に反対=5）の5件法で回答を求め、合計点を算出した。

得点が高いほど規範意識も高いといえる。

分析

本研究では、まず現代青年の扶養意識の構造を明確にするため、独自に作成した扶養意識に関する質問項目に対して因子分析を行った。次に、基本属性を独立変数、扶養意識を従属変数とし分散分析を行った。さらに扶養意識を従属変数、規範意識、家族機能を独立変数とし重回帰分析を行い、家族機能と規範意識が扶養意識に及ぼす影響について明らかにした。以上の分析には、ステップワイズ探索的因子分析 (Stepwise Exploratory Factor Analysis ; Kano & Harada, 2000)、統計ソフトウェアSPSS (SPSS Inc., 1993) を用いた。

4. 結果

被調査者の属性

被調査者の属性については、Table 2 に示すとおりである。

Table 2. 被調査者の属性

【性別】	男性 140名 (47.8%)	女性 153名 (52.2%)	
【家族形態】	一人暮らし 112名 (38.5%)	家族と同居 179名 (61.5%)	
【祖父母との同居経験】	現在同居 41名 (15.7%)	過去同居経験あり 83名 (31.8%)	同居経験なし 137名 (52.5%)
【続柄】	長男 96名 (32.8%)	長女 120名 (40.9%)	その他 77名 (26.3%)
【両親の老後についての会話の有無】	会話あり 107名 (36.5%)	会話なし 186名 (63.5%)	

扶養意識について

まず、各項目ごとに回答の偏りの程度を明らかにするため度数分析を行った。その結果、扶養意識28の質問項目のうち、偏りがみられた「将来、親を自分の生活力に応じて経済的に援助する」(尖度=1.771、歪度=-1.226)、「親が生活に困っていれば経済的援助を行うのは当然だ」(尖度=2.450、歪度=-1.416)の2項目を削除した。また、ピアソンの積率相関分析を行ったところ、「親と同居するつもりはない」、「将来、親と同居するつもりだ」の2項目間に-0.72という高い負の相関がみられた。この2つはほとんど同じ内容についての回答を求めていることになるかと判断し、「親と同居するつもりはない」を削除した。さらに、「必要とされれば配偶者の親と住んでもよい」、「家庭を持てば親との付き合いが減るのは当然だ」、「親と一緒に住んだほうが安心できる」の3項目を扶養意識の質問項目として意味的

に不適切であったと考え削除した。

以上の6項目を削除し因子分析(最尤法、varimax回転)を行った結果、6因子が抽出された。固有値1以上で解釈可能であったため、この6因子を採用した。共通性が低いため因子の説明力は概して小さいが、因子のまとまりは比較的明瞭である。

各因子について内容から判断して、第一因子から「介護拒絶意識」、「同居意識」、「扶養優先意識」、「扶養についての関心」、「介護への保守的態度」、「条件付き扶養意識」と命名した(Table 3)。

Table 3. 扶養意識構成因子

【項目】	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
介護拒絶意識 ($\alpha=.80$)						
私にとって親を家で介護するより施設に入れるほうがいい	.86	.05	.08	.03	-.05	.01
親が自分で自分のことができなくなったら老人ホームに入れたい	.80	-.11	.06	.08	-.03	.02
親の介護を国や自治体に任せられるのならそうしたい	.71	.04	-.09	-.08	-.11	.15
お金で済ませることができるなら親の世話をするつもりはない	.43	.00	-.36	.00	.11	.04
介護することによって自分の時間が減るのはいやだ	.42	-.14	-.12	.06	.05	.09
同居意識 ($\alpha=.71$)						
結婚したらすぐ親と同居する	.19	.65	.06	.06	.23	.04
将来、親と同居するつもりだ	-.07	.53	-.06	.40	-.04	.05
親と一緒に住んでいると、互いに気を遣うことがたくさん出てくる	.22	-.44	.13	.20	.11	-.05
親に近くに住むことや同居することを求められると困る	.34	-.48	.10	.00	.17	-.17
家が近ければ同居する必要はないと思う	.04	-.55	-.04	.00	-.02	.24
扶養優先意識 ($\alpha=.65$)						
将来どんなことをしてでも親を援助する	-.02	.05	.69	.05	-.06	.13
何をおいても親の世話をする	-.05	.17	.47	-.07	.17	.03
経済的に苦しくなるなら親の世話はしない	.03	.02	-.60	.04	.03	.08
扶養についての関心 ($\alpha=.50$)						
親との同居についてよく考える	.11	-.04	-.07	.79	-.06	-.15
親がある年齢になったら同居する	.14	-.01	.05	.34	.17	.29
今のところ親の介護をどうするか考えられない	.03	-.17	-.07	-.41	-.11	.23
介護への保守的態度 ($\alpha=.53$)						
親が老人ホームに入るのは世間体が悪い	-.14	-.01	-.09	-.06	.67	.04
男性が介護するよりも女性が介護するほうがよい	.15	.05	.02	.03	.43	.08
家族以外の人に介護されたくない	-.32	-.04	.10	.04	.41	.06
条件付き扶養意識 ($\alpha=.45$)						
メリットがあれば親と同居する	.13	.04	-.16	-.20	.11	.63
福祉手当を受けられるなら、親を養う	.07	-.09	.11	-.09	.05	.50
親が病気になるたら同居する	.07	-.08	.08	.30	-.08	.40
寄与率 (%)	22.4	6.3	5.3	3.8	2.8	2.6

df=114, Chi-square=166.13, $P>0.01$ GFI=.95, AGFI=.89, CFI=.96, RMSEA=.04

基本属性が扶養意識に与える影響について

1) 性別

分析の結果、男女間で介護拒絶意識 ($F(1,291)=3.47, n.s.$)、同居意識 ($F(1,291)=.76, n.s.$)、扶養優先意識 ($F(1,291)=.01, n.s.$)、扶養についての関心 ($F(1,291)=2.19, n.s.$)、介護への保守的態度 ($F(1,291)=1.45, n.s.$)、条件付き扶養意識 ($F(1,291)=13.72, n.s.$)、すべての下位尺度において有意な差がみられなかった。

2) 家族と同居・一人暮らし

扶養優先意識において有意な主効果 ($F(1,291)=8.06, p<.05$) がみられた。この結果は、親と同居している方が独り暮らしの被調査者よりも扶養優先意識が高いことを示している。

3) 祖父母との同居経験

被調査者を祖父母との同居経験のある群とない群に分け、扶養意識の各因子得点において2群の間に差があるかを検討するために一元配置の分散分析を行った。またこの際、現時点で祖父母と同居している場合は、同居経験のある群に割り当てた。分析の結果、同居

意識 ($F(1,291)=7.58, p<.01$) において有意な群の主効果がみられた。このことから、祖父母との同居経験のあるほうが同居意識が高いということが明らかになった。

4) 続柄

被験者の続柄を長男・長女・その他の3群に分け扶養意識との一元配置の分散分析を行った結果、介護拒絶意識 ($F(1,293)=3.39, p<.05$) において続柄の主効果が有意であった。さらに下位検定の結果、介護拒絶意識において長女とその他との間に有意な差がみられた。この結果は、長女の方がその他よりも介護拒絶意識が低いことを示している。

5) 両親の老後について両親との会話の有無

両親の老後について、両親との会話の経験の有無と扶養意識との一元配置の分散分析を行った結果、介護拒絶意識 ($F(1,293)=4.82, p<.05$)、同居意識 ($F(1,292)=8.21, p<.01$) においてそれぞれ有意な主効果がみられた。この結果は、両親と両親の老後についての会話をした経験のある人の方が、経験が無い人よりも介護拒絶意識が低く、同居意識が高いことを示している。

家族機能・規範意識が扶養意識に与える影響について

扶養意識を従属変数、家族機能・規範意識を独立変数とし、重回帰分析を行った。その結果をまとめたものがTable 4である。

Table 4. 扶養意識を従属変数、規範意識・家族機能を独立変数とした重回帰分析の結果

独立変数	従属変数					
	介護拒絶意識	同居意識	扶養優先意識	扶養についての関心	介護への保守的態度	条件付き扶養意識
規範意識 (家族機能)	-.137 **	.162 **	.295 ***	.175 **	.333 ***	.152 **
凝集性	-.210 ***	.200 ***	.100	.205 ***	-.029	.066
表出性	-.134 *	.090	.107	-.138 *	-.042	.003
専断性	-.027	-.032	.013	-.063	-.018	.064
独立性	.058	-.043	.053	.108	-.095	-.022
道徳宗教性	-.100	.007	.079	.012	.097	.027
決定係数	.110 ***	.075 ***	.087 ***	.081 ***	.111 ***	.023 **

表中の数値は標準偏回帰係数 (β) ; * $p <.05$, ** $p <.01$, *** $p <.001$

重回帰分析の結果、家族機能においては、凝集性と表出性が介護拒絶意識と扶養についての関心に、凝集性が同居意識に有意な影響を与えることが明らかになった。また、規範意識が扶養意識に与える影響については、扶養意識の下位尺度6因子全てに規範意識が有意に影響していることが明らかになった。

5. 考察

扶養意識について

細江(1987)は、扶養意識を同居扶養意識・経済扶養意識・介護扶養意識に分けているが、本研究においては「介護拒絶意識」「同居意識」「扶養優先意識」「扶養についての関心」「介護への保守的態度」「条件付き扶養意識」という6つの扶養意識の下位概念が抽出された。同居意識以外は介護拒絶意識・扶養優先意識といった扶養に関しての漠然とした概念しか抽出されなかったが、これは、大学生が現実的に老親扶養に直面していないからだと考えられる。

属性が扶養意識に与える影響について

本研究では扶養意識について性差がみられなかった。このような結果が得られたのは、昔からの長男（男子）が家を継ぐという家規範意識が薄れているからだと考えられる。直井（1993）は男女平等、個人の尊厳を基盤とした家族理念の影響で、女性が自分の親でもないのに夫の親を介護すべきだとされてきたことについて反発が表出されるようになり、長男が老親を扶養すべきだという意識が男女ともに薄れてきているとしている。本調査の結果は、このような家規範意識の変化を裏付けている。

家族形態と扶養意識との関連性については、家族と同居している大学生と一人暮らしの大学生とを比較した結果、親と同居している方が一人暮らしよりも扶養優先意識が高いという結果が得られた。このような結果が得られたのは、一人暮らしをしている大学生は、毎日親と生活を共にしている大学生に比べて、家族の日常生活に関心が向かず、親も子供の援助を求めることが少ないために、親の扶養に関心が向かないからだと考えられる。神川（1984）は、自分の自由な生活ができる家庭条件にある場合には、親の生活を省みることが少ないとしている。また、親と同居している大学生は、食事や洗濯などの家事を親にしてもらっているために、将来は恩返ししようとするのかもしれない。しかし、それとは反対に、親に家事を任せることができると、両親と同居することを積極的に希望している可能性もある。

祖父母との同居経験の有無と扶養意識の関連性については、祖父母との同居経験があるほうが、同居意識が高いという結果が得られた。このような結果が得られたのは、両親がその親と同居していることを実際に経験したことにより、両親との同居に対して抵抗が少ないからだと考えられる。過去、中学生を対象とした研究で、高齢者と接する機会が多い中学生は高齢者に対して肯定的なイメージを持つという結果が報告されている（馬場・中野・冷水・中谷、1992）。本調査の対象者は中学生ではないが、祖父母との同居を経験したことのある大学生は、老親と同居することに対して否定的なイメージよりも肯定的なイメージを強く持っている可能性がある。

両親の老後についての会話の有無が扶養意識に与える影響については、両親の老後について両親と会話をした経験がある大学生の方が、ない大学生よりも介護拒絶意識が低く、同居意識が高いという結果が得られた。これについて、本研究と同様に神川（1984）の研究においても、親の態度や両親との会話の程度によって同居意識が変化するとしている。扶養意識と家族機能の関連性の所で詳しく述べるが、このような結果が得られた理由としては、家族としてのまとまり、つまり凝集性が影響しているのではないかと考えられる。凝集性が高い家族は、家族間での会話も多く、その結果両親と両親の老後の世話について話し合う機会も生まれるのではないだろうか。両親との会話の有無が同居意識、介護拒絶意識に影響を及ぼすのではなく、会話の有無は凝集性の媒介変数として作用したと考えられる。

家族機能が扶養意識に与える影響について

扶養意識と家族機能の関係において、同居意識と凝集性との間に有意な関係があったことから、家族としてのまとまりがあり、率直に感情を表出できることで、両親との会話も増加し、同居意識も高くなると考えられる。これは両親との会話の程度によって、同居意識は変化するという神川（1984）の見解と一致する。しかし、両親が干渉しすぎる、または厳しすぎる態度をとる場合、別居を望む傾向が強くなる（神川、1984）ということから、家族とし

てのまとまりが過剰になることにも問題があると考えられ、今後検討されるべきである。

また本研究において、介護拒絶意識・扶養についての関心が凝集性・表出性に有意に関係しており、家族としてまとまりがあり、率直に何でも話し合うことができる方が扶養意識は高まるということが明らかになった。凝集性・表出性の高い家族をもつ大学生は介護に対して否定的にならず、むしろ扶養に関しても前向きに考えることができるのではないだろうか。さらにこのような結果が得られた背景には、家族関係の満足度が影響しているのではないかと考えられる。細江（1987）の研究では、経済扶養意識・介護扶養意識は本人の家族への満足がそれぞれの規定要因となっており、家族関係に満足しているかどうか、親の経済扶養や介護扶養に対して積極的に関わろうとする意識を生みだすとしていることから、このことが窺える。

規範意識が扶養意識に与える影響について

分析の結果、規範意識は扶養意識の6つの下位尺度全てに有意に影響しており、規範意識が高いほど扶養意識も高いことが明らかになった。

これまで規範意識と扶養意識との関連性を取り上げた研究（例えば、西岡、1993；鈴木、1991）では、規範意識を長男は家を継ぐべきであるという家規範意識と定義していた。しかし、本研究でもちいた規範意識尺度は、家規範意識を測定したのではなく、より社会的な規範を取り扱ったものであり、直接扶養に関する規範を質問したものではない。そのため、本研究で用いた規範意識は一般的な社会通念である、老親を扶養することは良いことであり親孝行はすべきだとする意識を反映していると考えられる。したがって、規範意識が高い大学生は、扶養意識も高いのであろう。

またここで注目したいことは、扶養意識全体に影響を与える規範意識には性差がみられなかったことである。このことは、女性であっても男性と同じように両親を扶養するのが望ましいと考えていることを示唆しており、直井（1993）のいう家規範意識の変化を裏付けている。

6. まとめ

本研究では、大学生の扶養意識の構造を明らかにし、その扶養意識に影響を及ぼすと考えられる要因について検討してきた。しかし、両親の老後の扶養は大学生にとっては未だ直面していない問題であり、老親の扶養の主体として位置付く将来まで、本研究で得られた意識が保たれているか否かは予測することが難しい。また、本研究では家族機能と規範意識が扶養意識に影響を及ぼしていると考えたが、実際には、このような一方的な関係であるかどうかは定かではない。したがって、今後は横断的な研究だけでなく、扶養意識が年を重ねるごとにどのように変化していくのかを把握するための縦断的研究が必要となると考えられる。

引用文献

馬場純子、中野いく子、冷水豊、中谷陽明 1992 中学生の老人感—老人感スケールによる測定— 社会老年学, 38, 3-12.

- 廣嶋清志 1991 近年における親との同居と結婚 人口問題研究, 47, 53-70.
- 細江容子 1987 親の老後に対する大学生の扶養意識 老年社会科学, 9, 96-108.
- 神川康子 1984 家庭環境が学生の人生観に及ぼす影響 家政学研究, 31 (1), 114-124.
- Kano, Y. & Harada, A. 2000 Stepwise variable selection in factor analysis. *Psychometrika*, 65 (1), 7-22.
- 厚生省人口問題研究所 1997 日本の将来推計人口 平成9年1月推計の中位推計値
久世敏雄、和田実、鄭曉齊、浅野敬子、後藤宗理、二宮克美、宮沢秀次、宗方比佐子、内山
伊知郎、平石賢二、大野久 1988 現代青年の規範意識と私生活主義について 名古屋
大学教育学部紀要(教育心理学科), 35, 21-28.
- 文部省 2000 大学・短期大学の規模等の推移。文部統計要覧(平成12年版), 178-179. 大
蔵省印刷局
- 直井道子 1993 高齢者と家族。サイエンス社
- 西岡八郎、池ノ上正子、才津芳昭、堀内真弓、高橋重郷 1995 現代日本の家族に関する意
識と実態—全国家庭動向調査の結果から— 人口問題研究, 51 (1), 1-22.
- 野口裕二、斉藤学、手塚一郎、野村直樹 1991 FES(家族環境尺度)日本版の開発: その
信頼性と妥当性の検討 家族療法研究, 8 (2), 147-157.
- 野口祐二 1997 FES日本版からみた家族評価尺度の課題 季刊精神科診断学, 8 (2),
137-145.
- 坂本佳鶴恵 1990 長男扶養に関する2つの規範—「家」意識の意味— 社会老年学, 32,
74-95.
- SPSS Inc. 1993 SPSS Professional Statistics, Release 6.x. SPSS Inc.
- 鈴木透 1991 結婚と世代間関係に関する規範意識の構造 人口問題研究, 47 (3), 28-41.
- 田淵六郎 1998 老親・成人子同居の規定要因—子どもの性別構成を中心に— 人口問題研
究, 54 (3), 3-19.
- 東條光雅 1987 三世代の女性における老親扶養に対する態度 社会老年学, 18, 29-36.